



名古屋大学ジェンダー・リサーチ・ライブラリ主催シンポジウム
後援：名古屋大学図書情報館

市川房枝 と 郷土愛知

11月8日（金）
12:10-13:20

会場：名古屋大学ジェンダー・リサーチ・ライブラリ（GRL）
2階レクチャールーム
定員：約60名（学外の方の参加も歓迎）オンライン参加も可
参加希望の方は、<https://v.vv100g>
または右のQRコードから事前申し込みをお願いします。

講演者1	講演者2	講演者3
宮川 充史	林 陽子	枝 松 栄
一宮市博物館学芸員 市川房枝を産んだ 風土と家族	名古屋大学法学部教授 市川房枝と平塚らいてう 一宮市が果たした役割	名古屋大学文学部教授 市川房枝 一宮市時代から上京、 婦人参政権獲得運動 をめぐる



GRLNEWS

Gender Research Library
Nagoya University名古屋大学
ジェンダー・リサーチ・ライブラリ

No.13

2025年3月発行

「市川房枝と郷土愛知」 シンポジウム開催報告

（名古屋大学ジェンダーダイバーシティセンター准教授）
三枝麻由美

2024年11月8日（金）に、「市川房枝と郷土愛知」と題したシンポジウムを、GRLにて開催しました。本シンポジウムを開催した理由は、日本女性の参政権獲得に尽力した市川房枝が、愛知県一宮市出身であることがあまり知られていないことを周知し、市川房枝の原点である愛知県での生活が、その後の生涯にどのような影響を与えたのかについて考察するためです。本シンポジウムには、「市川房枝と郷土愛知」を語るにふさわしい3名の講演者を招聘し、GRLのレクチャールームでの対面とオンラインによるハイブリッド開催を実施しました。多くの方にお昼休みを利用して気軽に参加してもらえるように、開催時間を12:10～13:20としました。

一番目の講演者である一宮市博物館学芸員である宮川充史さんは、名古屋大学で博士（歴史学）を取得されました。宮川さんは、市川房枝が生まれた明地村がどのような場所であったか、市川房枝の両親や兄弟はどのような人物であったかという点を考察し、それらが市川房枝に与えた影響の可能性について説明されました。宮川さんは、市川房枝の生家は農業地帯にあり、小さい頃から農作業を手伝ったことで、諦めな

い気力や簡単にバテない体力を養ったことが、後に市川房枝がエネルギッシュな活動を継続できた礎になっていたのではないかと考察されました。また、妻には癩癩持ちでも、子どもの教育に大変熱心であった父親や、アメリカに渡航した兄などの影響を多分に受けて、市川房枝は育ったのではないかと話をされました。

二番目の講演者である市川房枝記念会の理事長である林陽子さんは、弁護士で、国連女性差別撤廃委員会の元委員長も務めた経験を持ちます。林さんは、講演などで女性差別撤廃委員会の話をする際は、市川房枝の貢献により日本が同委員会に批准することができ、そのことが、その後の男女雇用機会均等法の成立につながる流れを作った点を強調していると話されていました。本講演では、日本の婦選獲得同盟に至る流れを作った、市川房枝と平塚らいてうとの交流や両者の比較について説明されました。特に、酷暑のなかで愛知県の工場巡りを行なった経験を通じて、平塚らいてうは、市川房枝の粘り強さや体力を目の当たりにし、自分の目指す運動には市川が必要だという思いを強めたとの指摘をされました。

三番目の講演者である枝松栄さんは、前職の国立国会図書館での経験を活かし、現在は市川房枝記念会において資料整理を担当されています。同記念会では、市川房枝の手紙、メモ、写真などの膨大な資料があり、枝松さんは、それらのアーカイブの整理の大変さを説明されました。市川房枝に関する戦前のアーカイブ資料は全てデータベース化され、現在は、戦後資料の整理を行なっているとお話がありました。

質疑応答では、会場から「愛知県は、市川房枝を産んだ郷土であることをもっと誇りにすべきである」、「ジェンダーギャップ指数が全国でも下位に位置する愛知県で、なぜ市川房枝のような人が出てきたのか」、「市川房枝は、多くの逆境に遭いながらも、自分の信念を貫いて日本女性の権利向上に貢献したことを改めて実感した」など、さまざまな感想が聞かれました。

本シンポジウムが一つの契機となり、愛知県と市川房枝との関連が今一度見直され、愛知県が日本の女性運動にとって重要な土地であることの認識が高まることを祈念します。

男女共同参画・多様性担当副総長 新副総長挨拶

(名古屋大学 心の発達支援研究実践センター教授)

永田雅子

2024年4月より男女共同参画・多様性担当副総長を拝命しました心の発達支援研究実践センターの永田です。私は心理学を専門としており、研究テーマは周産期から乳幼児期の家族支援です。結婚、出産、子育ての中で、女性のほうが悩み葛藤しながら自分らしくあることとのバランスをどうとるかという課題に取り組まざるをえない状況が続いています。多様な在り方や生き方があって当たり前ではある一方、どこかで私たち自身が“こうあるべき”という姿や、“普通であること”という実態のない幻にとら

われているのかもしれません。2007年に名古屋大学に着任以降、学内の保育園の責任者をはじめ、男女共同参画の施策にかかわってきましたが、様々な環境が整えられてきた一方、課題は山積しています。ジェンダーに特化した大学の図書館であるジェンダー・リサーチ・ライブラリ(GRL)が開かれた場としてあることは、人々が足を止め、これまでの知の集積でもある書籍の数々に目を止め、触り、手にすることでその重みを感じ、本を開いて思いを巡らせ、そして誰かと語り、ことばに耳を傾けることのできる空

間と時間を提供することだと思います。この場を守り、土を耕し(本を集め)、水をやり(集いの場を提供し)、ジェンダー学にかかわる大きな枝葉がひろがっていくことができるようにしていくことが本学の役目だと思っています。皆様に愛され、育てていただけるGRLとなるよう、皆様のお力添えをいただけると幸いです。



ジェンダーダイバーシティセンター 新センター長挨拶

(名古屋大学大学院 生命農学研究科教授)

山崎真理子

今年度より名古屋大学ジェンダーダイバーシティセンター(GDC)長を拝命いたしました。どうぞよろしくお願いいたします。

ジェンダー・リサーチ・ライブラリ(GRL)は、ジェンダー平等に関する多様な視点を学び、課題を深く考え、その記録を未来へと確実に引き継ぐことができる貴重な場です。その意義は単なる学術的探究にとどまらず、社会全体へと広がる可能性を秘めています。ジェンダーの課題に対して、多くの先達が時代や地域を超えて多様な立場から記録を残しており、これらは現代を生きる私たちにも多くの示

唆を与えてくれます。そして、私たち自身もまた、現代社会の中で議論を紡ぐ重要な担い手であり、その記録を次世代へと繋ぐことがGRLの大切な使命です。

ジェンダー平等の推進は、単なる「女性支援」にとどまるものではなく、誰もが自分らしく学び、働き、成長できる環境づくりに直結しています。特に大学という場では、多様な価値観が共存し、互いに尊重し合うことが不可欠であり、そうした環境を構築するためにも学内外の研究者との連携と協働の場の存在は大変重要です。GRLは、その知的基盤として非常に重要な役

割を果たし、私たちの強力なパートナーとなる存在です。

大学は知の拠点であると同時に、未来を見据えた課題解決の場であるべきです。GDCとして、これまで蓄積されてきた知見の宝庫であるGRLと今後さらに連携を深め、ジェンダー平等の推進に力強く寄与していきたいと考えています。今後の展開を心より楽しみにしています。



ジェンダー・リサーチ・ライブラリ(GRL) 新担当教員挨拶

(名古屋大学 ジェンダーダイバーシティセンター准教授)

三枝麻由美

2024年4月より、GRLの担当教員になりました。私の専門は社会学で、ジェンダー平等推進施策に関する国や大学レベルでの国際比較、女性教員や理系女性の活躍をめぐる現状や課題に関する分析などを行なっています。

ジェンダーダイバーシティセンターにおいては、これまで文部科学省「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ」事業を主に担当し、「LGBT等に関する名古屋大学の基本理念と対応ガイドライン」等の策定に尽力してきました。教育面では、日本語によるジェンダー授業の実施に加え

て、英語によるジェンダー授業を推進してきました。

GRLは、名古屋大学の教職員・学生だけでなく、広く一般の方にも開放しており、ジェンダー研究に特化した大学図書館として、日本だけでなく、世界的に見ても非常に貴重な図書館です。また、1階にはカフェがあり、ライブラリ内には多くの椅子やソファが設置されているなど、心地よい空間が提供されています。このような魅力的な特徴を備えたGRLをさらに発展させるために、自分に何ができるのかを自問しながら、いろいろな方のお力を借りなが

ら、日々取り組んでいます。その取り組みの一つとして、GRLのウェブサイト新しいものに作り変え、GRLの持つコンテンツをより視覚的に、わかりやすく情報発信できるようにしました。今後もさまざまな形で、GRLの活動推進を通して、ジェンダー研究の向上に寄与していきたい所存です。



GRLホームカミングデイ企画 「ポスターで見るジェンダー関連図書」開催報告

(名古屋大学ジェンダー・リサーチ・ライブラリ司書)
坂川万理子

ホームカミングデイには「家に帰る」「故郷に帰る」「帰郷」の意味が込められており、名古屋大学では卒業生に「旧友、先生、在学生に会い交流を深める場」、「大学の静かな雰囲気や発展しつつある大学の姿を感じ取っていただく場」を提供するため、毎年10月の第3土曜日にホームカミングデイを開催しています。

第20回にあたる名古屋大学ホームカミングデイは、小雨の降るなか、10月19日(土)に開催されました。GRLでは、「ポスターで見るジェンダー関連図書」と題

し、ライブラリに所蔵された本をポスターで紹介するイベントを行いました。

GRLは、名古屋大学の南西に位置するジェンダー関連図書を取り扱う専門図書館です。ホームカミングデイでは、その魅力を伝えるべく、大学院生スタッフによるポスター展示を行いました。5名の院生スタッフが、それぞれの研究テーマの中からジェンダー関連書籍を選び、来場者の目を引く内容を考えながら思考を凝らしてポスターを制作しました。さらに、過去の院生スタッフが制作したポスターも加えて、全部で15

点のポスターを展示し、それらのポスターで紹介されている書籍も配置しました。

来場されたお一人お一人に、院生スタッフおよび司書がポスターの説明を行いました。来場者とのジェンダー談義にも花が咲き、ライブラリ内は終始活気に満ちていました。終わってみれば、50名もの方にご来場いただきました。本イベントを通じて、ジェンダーについてもっと知りたい、学びたいという方が増え、GRLを利用される方が増えることに繋がれば、司書としては嬉しい限りです。

【ポスター紹介書籍】

- ① シーラ・ジェフリーズ著『美とミソジニー 美容行為の政治学』
- ② 河添房江著『性と文化の源氏物語 書く女の誕生』
- ③ 堀越英美著『女の子は本当にピンクが好きなのか』
- ④ 深沢夏衣著『深沢夏衣作品集』
- ⑤ 平山亮・佐藤文香・兼子歩編『男性学基本論文集』
- ⑥ ケイト・マン著、鈴木彩加・青木梓紗訳『エンタイトル』
- ⑦ 清水晶子・ハン・トンヒョン・飯野由里子著『ポリティカル・コレクトネスからどこへ』
- ⑧ 中国ジェンダー研究会編『中国の娯楽とジェンダー』
- ⑨ フェルナンド・バエス著、八重樫克彦・八重樫由貴子訳『書物の破壊の世界史 シュメールの粘土版からデジタル時代まで』
- ⑩ マーガレット・アトウッド著、斎藤英治訳『侍女の物語』、マーガレット・アトウッド著、鴻巣友季子訳『誓願』
- ⑪ 木村朗子著『女たちの平安宮廷 栄花物語によむ権力と性』
- ⑫ 信田さよ子著『家族と厄災』
- ⑬ 田中東子編著『ガールズ・メディア・スタディーズ』
- ⑭ マーリーン・ズック著、佐藤恵子訳『性淘汰』
- ⑮ アン＝マリー・スローター著、関美和訳『仕事と家庭は両立できない?』



私と研究とブックトーク

(名古屋大学大学院教育発達科学研究科博士前期課程)
丸田梨乃

ジェンダー問題は女性だけの問題でしょうか? また、フェミニストの多くが女性ですが、ジェンダー問題=フェミニストのこと、男性は無関係なことでしょうか? 世間一般ではまだまだ「ジェンダー」=「女性のこと」という認識が強いのではないかと思います。特に近年は「ツイフェミ」という言葉とともにジェンダー問題=フェミニストという意識から忌避感を示す人も多くいるように感じます。そうした今日のジェンダーを取り巻く状況を踏まえ、これまで過去3回にわたって担当したブックトークでは、いかに男性にジェンダー問題について当事者意識を持ってもらえるかという観点から本を選びました。1回目のブックトークでは、女性がいかに日常生活を男性と同様に過ごすことが難しいのかについて書かれた『フェミニストシティ』を、2回目のブックトークでは男性が無意識のうちに信じ込んでいる、もしくは当たり前だと思っている特権意識について紹介した『エンタイトル』を、3回目は男性がフェミニストとして生きるうえでの葛藤や苦悩を紹介したエッセイ本『私は男でフェミニストです』を紹介

しました。特に3回目のブックトークでは本のタイトルも相まって、男性の方や男子学生の方も普段より多く参加していただき、感想や質問などの意見交換も活発に行うことができ、双方向的なやり取りをすることができました。

さて、私がこのようにブックトークで男性に向けた書籍を選んでいる背景には私の研究テーマも関係しています。私の研究テーマは「性暴力」です。女性で性暴力を研究しているというと、性暴力「被害」を想像される方が多いのですが、私の研究対象は「性暴力加害」(以下、性加害と言います。)です。性加害研究は、臨現場や握りの量的研究を除いて、ほとんど行われてこなかったテーマです。ですが、性暴力は女性だけの問題でしょうか? 性加害は被害者の魂もその後の人生も壊す非道な行為です。そのような行為を減らすのに、従来の再犯防止中心の研究だけでいいのでしょうか? 最も重要なことは性暴力被害に遭う女性を減らすために、性加害をする人間を減らすことではないでしょうか? そうした考えから一般の男性を対象にした量的調査を行い、性加害の実態

把握および有病率を把握するのに適している調査票の作成や、性加害に影響を及ぼすと指摘されている要因との関連を研究しています。私は性加害の研究をとおして、女性や子供たちが安心して生活のできる社会を作ることはもちろん、男性が社会規範という「鎖」から解放され生きやすい社会になること、さらには真に男女平等な社会を作るために男性が共同参加者になってくれることを目指しています。

そして、その試みの一つとして、ブックトークは研究以外の場としてとても貴重な機会を私に提供してくれました。今後ももっと多くの人に関心をもってもらえるようなブックトークを開催できるように、取り組んでいきたいと思っています。



新ウェブサイトのご紹介

この度、GRLではウェブサイトのリニューアルを行い、新しいサイトに変更しました。新たなサイトは、情報を視覚化してわかりやすい設計になっており、欲しい情報まで簡単に辿りつけるようになっています。GRLで所蔵する新着図書、水田珠枝文庫、アーカイブ、コレクション、「GRL News」、「GRL Studies」などが、トップページから見るできるようになっています。また、すべてのページを日英表記することで、国内外の方々に見ていただける工夫も行いました。さらには、2025年度から新たに設けられた「GRL Visiting Program」や「ジェンダー研究助成」についてのアイコンを、トップページに常設しました。ぜひ、GRLの新ウェブサイトアクセスしてみてください。



ご寄附のお願い

GRLは、ジェンダーに関する研究、教育、研究者の育成、ならびに男女平等意識の啓発、普及に向けて、フェミニズム、ジェンダー研究に関わる図書、雑誌、リーフレットやパンフレットなど、多様な文献、史・資料を蒐集・保存するとともに、研究者はじめ学生、市民など多くの方々にご利用いただくことで、ジェンダー研究を実践的に発展させていくことをめざしています。

GRLのようなジェンダーをテーマとした研究活動施設は全国的にも珍しく、その個性的でユニークなありかたは、21世紀の知のパラダイム・チェンジに貢献しうる大きな可能性を有しています。GRLがジェンダー研究を深化させ、その成果を社会に還元できる知の拠点へと成長していくためには、文献、史資料を散逸させることなく、蒐集、保存、整理し、広く提供できるライブラリ、アーカイブの存在が不可欠です。

GRLが、先人たちの知の営みを次代に継承していけるよう、みなさまのご支援を賜りたく、お願い申し上げます。ご寄附金等をいただける場合には、こちらのメール(grl@t.mail.nagoya-u.ac.jp)までお知らせ下さい。



お問い合わせ: grl@t.mail.nagoya-u.ac.jp

電話: 052-789-5111 (代表)

アクセス: 〒464-8601 名古屋市千種区不老町
地下鉄名城線「名古屋大学駅」1番出口より徒歩1分